

作品「城山」に象徴された独歩文学の本質

小 野 茂 樹

国木田独歩が明治二十八年五月に「国民新聞」に連載した『豊後の国佐伯』と題する回想文のなかに「城山」という一文がある。左にその一部を引く。

「秋の半ば過ぎ、余は紅葉狩りせんとて城山の頂に登り落葉簾々の間屢々耳を澄まして風の行方を追ひ、吾知らず古跡一種の寂寞に融け行々楽みたり。

(中略)

一夜強風起り、庭園の樹木さへ多少の害を被りし時、独り城山に登りて其背面のもの寂し気なる処に至れば、蔦葛纏ひたる石垣の蔭に人の声きこゆ、近づけば三人の村女可憐の姿にて折れ枝を集め居たるを見しより、古城の跡なほ優しき血の通ふが如きを感じたり。」

私は右の文中にある「近づけば三人の村女可憐の姿にて折れ枝を集め居たるを見しより、古城の跡なほ優しき血の通ふが如きを感じたり。」という辺りなど、まさに独歩の文学の本質を象徴したものだと考える。「城山」と題しながらも、ここに描かれた城山は単に自然の景物としての城山でなく、この地域にあけくれ生活する佐伯人と親密な交流をもち、ある時は枯枝を拾う可憐な村娘をもそのふところに抱く「優しき血の通う」ような城山である。人間をつねに大自然との関連において考えずに行われなかった独歩の人生観は、右の短文のなかにおいて十二分に表徴されているのを見ることができるのである。

独歩は文学史上では一応自然主義作家の一人のごとく見なされている。そしてたしかにその手法等の上においては自然主義的なリアルな人間描写を見ることができ、それにしても独歩の自然主義は、いわゆる文壇の自然主義とはかなり異質のものを持っている。極端に云って、世の自然主義者が人間をもっぱら社会、すなわち人間の世界において観察描写しようとするのに対して、独歩は人間を単に社会の一員としてだけ見ることができなかった。人間の背後に横たわる無限無窮の大宇宙を忘れて人間の存在性を考えることができなかったのである。この不可思議なる大自然とは何ぞ、人間とは何ぞ。人間と自然との関係は如何。寝てもさめても独歩の脳裡から去らなかつたのがこの宇宙人生の問題であった。そして大自然の美や無限に驚異するにつけて同時に彼の心を圧してくるものは、それと対照的な有限の生命をもつ人間

の一生であった。誰かれの相違もなくこの自然の中に消え去つてゆかねばならぬ人間の厳粛な事実であった。そこにおのずから独歩の深い人間観も生まれてくる。人間そのものに対する心からの同情、そしてあるいはやるせない寂寥や孤独感や悲哀の念も生じてくる。

私は従来も折々強調してきたところであるが、右のような独歩特有の思想人生観を最も深く彼の内面に刻みつけたのが佐伯時代であったと考える。東京をあとに大分県の佐伯町にあった私塾「鶴谷学館」の教師として下つて来た二十三歳の独歩は、そはれから約1カ年の佐伯生活を送ったが、この佐伯時代は独歩の生涯中他と比較できぬほど純真まじめな修養時代であった。この時期の彼は酒もタバコものまず、何一つ娯楽機関もない田舎町にあつて、熱心に佐伯の子弟を教えるかたわら、ひまさえあれば佐伯およびその周辺の自然のなかを歩きまわるのを日課とした。そして同時に彼はその青春の魂をささげ、右の宇宙人生の問題と取りくんだのであつた。この時代の独歩がいかに深酷な内面生活に徹したかは、日々彼が記しつづけた『欺かざるの記』が如実にそれを示すところであるが、血みどろとも評し得る真剣そのものの思索生活の中に独歩の心底に刻みつけられた思想人生観こそ、後の独歩作品の基調をなすものだといって、けつして過言にはならないだろう。

今、それに関して、この頃の独歩の人生観のうかがえるものの幾つかを『欺かざるの記』の中から引いてみるならば、町なかを歩いては、

「此のさびしき市街！ ウォーズウォルスが村落を見たる同情を以て観せしめよ。意味深き物語なからめや。うす暗き燈障子にうつりたる家、戸じまりして人げ空しき家、軒破れてかたむける家、笑ふ声のもるる家、かの鍛冶屋、彼の桶屋、彼の乞食、彼の子供等、彼の理髪所、彼の井戸、豈に意味深き物語なしとせんや。」

と云い、元越山腹から立ちのぼる白煙を見ては、

「見よ、今日もうらしろ峠の美しき山の平野より白き煙立ち登るなり。此白き煙、又物語の料なり。吾は此をたく人を想像し、其の一生を想像し、其の運命を想像し、同情の涙なしとせんや。生死のつきざる海より此の白煙の立ち登るを見よ。」

と云い、河船に乗つては「之れによりて往復する田舎の

民、其婦、其姪、其少女、同情に堪へぬは此等の生涯なり」という。あるいは妙見神社に参つては、

「吾独り徘徊して去る能はず、堂に上りて、或は壁上の戯書を眺め、或は百人一首の中、小野小町、在原業平等の数名の肖像に伴ふ和歌を額にして掲げたるを仰ぎ見、人間の事、時の変遷の事、人情の事、天地の事など感想し来りて幽思うた深きを覚えぬ。」

と云い、あるいは鶴谷学館への登校の道でも「今夜雨を衝いて登校、路陝巷の暗き処を過ぐ。思うて人生の生存、天地の玄妙の事に至り、卒然として回顧すれば、雨暗く、魂泣く。」ともらすのである。独歩の処女作『源叔父』は薄幸の老船頭と「紀州」と呼ばれる哀れな乞食の児とを主人公とするものであるが、これらの人物に対しても、すでに佐伯時代において独歩の人間観は「佐伯に一個の老翁あり、奇怪のものを担うて行くをしばしば見受けぬ。この老翁の事を問い、多少聞き得たり。この翁同情に堪えず、何れの時か遇うて親しく語るべし。」と日記に書きつけ、あるいはまた紀州に対しては「嗚呼等しき人間、天の下地の上の事実、如何に解釈すべきぞ。生命それ自身驚くべく畏るべしとすれば、この地上に捨てられたるこの生命の命運は、更に意味ある驚懼の事実非ずや。」とも書くのである。

このようにして独歩は自然に対するにつけて人間を思った。人間を見るにつけてその背後を流れる無限不可思議な自然を思った。そして自然が美麗であればあるほど自然が壮嚴と無限をもって圧すれば圧するほど、独歩の詩魂は直ちに有限の宿命に生きる人間そのものの上に注がれたのであった。そして限りない同情となつかしさを人間の上に感ずるのである。

独歩は名作『忘れ得ぬ人々』の中で、「忘れ得ぬ人は必ずしも忘れてかなうまじき人ではない。恩愛の契りもなければ義理もない、ほんの赤の他人であって、本来を言うと忘れてしまったところで人情も義理も欠かないでしかもついに忘れてしまうことのできない人」といい、そしてまた「我と他との相違があるか。皆これこの生を天の一方、地の一角に受けて、悠々たる行路をたどり相携へて無窮の天に帰るものではないかというような感が心の底から起ってきて、我知らず涙が頬を伝うことがある。その時は実に我もなければ他もない。ただ誰もかれも懐しくしのばれてくる。」ともいっているが、その忘れえぬ人というのはほかでもなく、無限の大自然のなかに生死してゆく哀しき宿命を担う人間同胞の一人一人だといえるだろう。

さて私の論を再び最初にかえすことにする。私が冒頭に取りあげた「城山」の一文、城山と折れ枝を拾う村

女との相融合した世界は、まさに独歩の人間観（それは自然観といっても差支えないが）を、引いては独歩文学の本質を最も端的純粹に象徴したものだと考える。城山はかならずしも佐伯の城山に限られたものでなく、独歩が驚異と愛着の眼をむける大自然の代表者であり、またそこに点じられた可憐の村娘たちは、その大自然に抱かれ大自然のなかに死をとげてゆかねばならぬ可憐なる人間たちの代表者なのである。大自然の中に生死をくりかえしてゆく人間の一人一人が、可憐なる村娘と同様に、すべて同情すべく悲しむべく可憐な存在者にほかならぬのである。

私はこの稿の終りに当って、かさねてここに『豊後の国佐伯』の中から「黄昏」ならびに「乞食」と題する二文を引き、その中にこもる独歩の深い人間観、その幽音悲調に耳を傾けてみたいと思う。

「黄昏」

夏の末、日已に城山の彼方に入りて、余光の水色の如く西の空に起り、城山の古松墨絵の如く浮び出づる頃、幾百千とも知れざる鳥の群輪を作りて飛びそのうち一群は分れて他の山に向って去ることありと雖も、多くは城山の深山の深林に峙を求めて投ず。

此時、桶を担へる少女少年の三々五々の群れ、水を城山の麓なる井戸に汲まんとて、静かなる士族家敷の角々より出で来るなり。笑ふ声、呼ぶ声、叫ぶ声、暫時は井戸の傍に聞ゆ。姉と弟と一つの桶を重げに担ひて、十間ゆきては息ひ、五間歩みなどするもあり。元気よき少年は一人にて桶二つを担ひ、勢よく走るもあり。されど彼等は遂に士族の子女たる可憐の風采を失はざる也。」

「乞食」

余が始めて此の乞食を街頭に見たる時は、之れ地獄の垣を脱け出でし者かと傍らの人に語りき。（中略）

破れ傘を腋に抱き、腐りたる草履を垢に黒き足にはき瘦せて枯木の如き手に握りて、何とも知れざる物を口に運びつつ行く彼を見たり、夜更けて古城市眠り、月光昔の如く街に満ちし或時、余彼を淋しき橋の上に見き。彼は只茫然として立ち、見るともなしに月を眺め居たり。天地孤独とは彼の事ならめと思ひやりし時は、涙なきを得ざりき。」